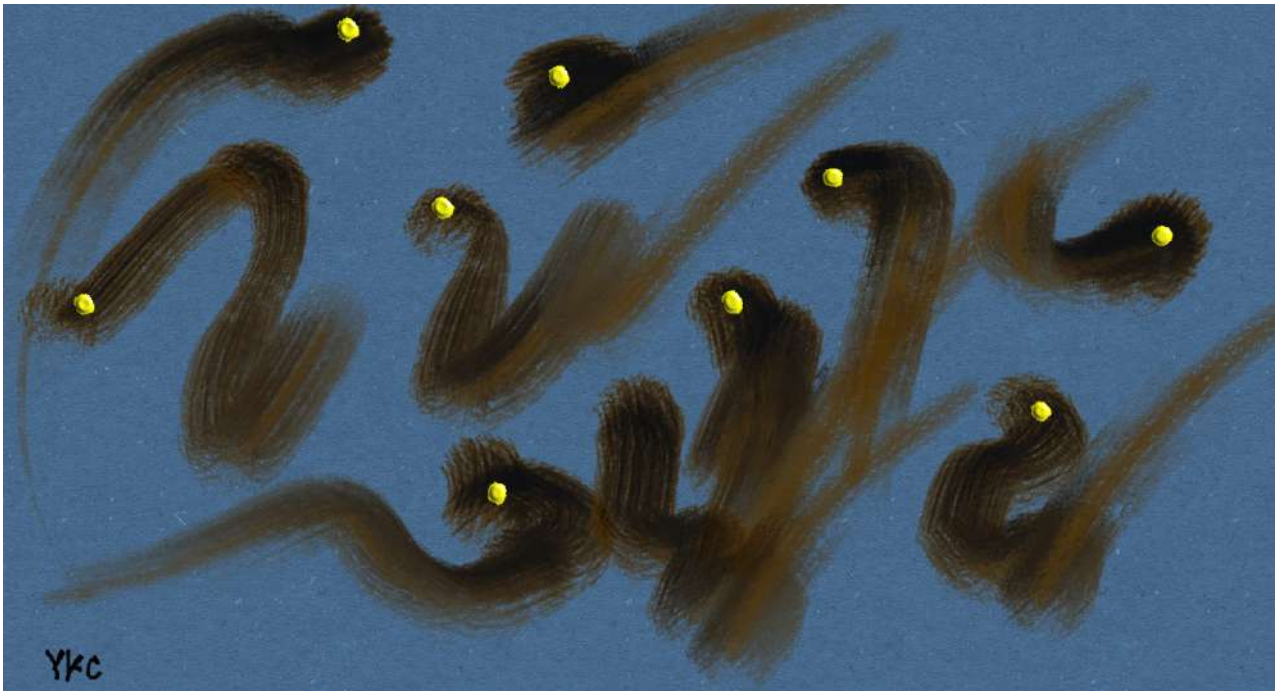
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 287

Website:「発達理論の学び舎」



No.37 空上で躍動するタツノオトシゴ_Dynamic Seahorses in the Sky

© YOHEI KATO 2020

目次

5721. 相互互恵的ベクトルへの変容

5722. 今朝方の夢

5723. 絶え間ない創作に向けて

5724. この1年間の食実践を振り返って:神通力と活力の獲得

5725. デジタル空間内の無限大の美術館･音楽館の創出に向けて

5726. 作曲と絵画の相思相愛関係

5727. これからの旅の楽しみ:今朝方の夢

5728. 危機察知能力

5729. 日々の小さな前進

5730. 今朝方の夢

5731. 今朝方の夢の続き:忘れられたものを取り戻すために

5732. 人類絶滅後の知的生命体の会話を聞いて

5733. 独自の音言語と絵画言語の獲得に向けて

5734. 今朝方の夢

5735. マドリガルに関する1冊の古書との出会い

5736. 最初の一音･最初の一筆

5737. 創作活動のモチーフ:今朝方の夢

5738. チーズの再考:作品の創り手の心身の状態

5739. 今朝方の夢:言語の習得と作曲･絵画の実践

5740. 人生の縮図としての創作物

5721. 相互互恵的ベクトルへの変容

穏やかな波音。今、それを聴いている。

以前までの私は、書斎で自分の取り組みに従事している時には常にピアノ曲を聴いていた。1日に12時間以上毎日ピアノ曲を聴いていた。ところが今はピアノ曲をそれほど長く聴くことはなく、1日の大半は環境音を聴くようにしている。波の音が収められた音楽や森の中に響く小川のせせらぎと小鳥の鳴き声が収められた音楽などをうまい具合に見つけ、それらを繰り返し聴いている。

もちろん、今この瞬間のように、本物の小鳥たちの鳴き声もそれらに付け加える形で聴いている。ヨーロッパの街にいながらにして、絶えず海辺にいるような形で、あるいは森の中にいるような形で毎日を過ごしている。将来、本物の海や森とすぐ近くの場所に生活拠点を設けるかもしれない。

なぜ自分はオランダの地に呼ばれたのか。なぜ自分は作曲と絵画の創作に呼ばれたのか。その点について昨日も思いを巡らせていた。

昨夜の就寝前には、今から10年前のことも思い出された。当時私はまだ大阪に住んでいた。当時の仕事は国際税務コンサルティングだった。その時の仕事とは全く異なる事柄に従事している今の自分。それは、この10年の間に大きな変容があったことを物語っている。

なぜか10年前の大阪時代のことがふと思い出され、記憶のイメージ世界の中にしばらくいた。自宅のマンションの前には公園があった。その公園は野球ができるような広さがあり、実際に野球用の金属網のようなものが公園の一角に張り巡らされていた。金網の下の部分はコンクリートになっていた。野球の投球練習や守備の練習をするために、そこにボールをぶつけている少年たちの姿を見たことはないだろうか。そうした練習ができるコンクリートがそこにあった。

当時すでに社会人になっていたが、会社にいく前や週末に、時々私はその公園でサッカーをして1人遊んでいた。その時の遊びの1つが、1m以下のコンクリートの壁にシュートを打ち、跳ね返ってきたゴロのボールに対して再びシュートを打つというものだ。これを左右の足で延々と繰り返すことが楽しみの1つだった。随分と昔の日記の中で書き留めたが、家の中でサッカーの練習をしていると、

下の人がうるさいと述べていると管理人の人から言われ、それ以降家の中でサッカーボールを触ることをやめた。

その公園に関する思い出は他にもある。公園の周りには立派な木々が植えられており、夏はそれらの木々が生命力豊かに輝きだす。その木々の下には歩道があって、そこを時々ゆっくりと走っていた。その際に、私は時々立ち止まり、木々に話しかけたり、木に手を当てて、木からエネルギーをもらったりしていた。そうなのだ、10年前の私は木からエネルギーをもらおうとするような発想を持っていたのだ。それが今はどうだろう。

今も私は、立派な木を見ると、それに近寄って心の中で話しかけたりしている。そして実際に木に手を触れたりもする。しかし私は、木からエネルギーをもらうというようなことをはもうしていない。むしろこちらからエネルギーを分け与えているのである。仮にあるとすれば、それはエネルギーの交換だろうか。少なくとも木から一方的にエネルギーをもらうというようなことは決してしない。

10年前の自分は、自分が何かを受け取ることだけを考えていたのではないかと思う。一方で今の自分は、そうした自分から脱却し、何かを分け与えようとする意思を絶えず持っている。片方の向きしかないベクトルが変化し、相互的なベクトルになったのだ。それによって、人生においても絶えず様々な相互的なベクトルが自分を取り巻くようになったように思う。

自己依存的なベクトルから相互互恵的なベクトルに変化したこと。それがこの10年間の自分に起きた1つの大きな変容だったように思う。そうした気づきを得た時、ベッドの上の私は眠りの世界に静かに入っていった。フローニンゲン:2020/4/11(土)07:10

5722. 今朝方の夢

打ち寄せる穏やかな波の音と小鳥たちの美しい鳴き声。それらが今自分の耳に届けられている。前者はパソコンに収められた音楽なのだが、自分の脳は、それを実家の瀬戸内海の穏やかな波の音のように認識している。

あと少しで欧米での9年目の生活が始まる。思い返してみると、この9年間においては、日本で身に付けたもの、あるいは染み付いたものを洗練させたり浄化させたりするような期間だったように思う。

毎年日本に一時帰国するたびに、日本に対する印象が変化していることからもそのようなことが窺える。一方で、そうした洗練･浄化期間は思っていた以上に長く続いていることにも気づく。そのプロセスは現在もまだ進行中なのかもしれない。

日本で生活することを通して獲得された感覚や思考の枠組みがまだ根強くこびり付いており、その浄化が依然として行われている。もちろん、直近の数年において、その浄化も進み、プロセスは佳境に入っているのかもしれないが、佳境から終結までは、ひょっとするとここから10年やそれ以上の年月が必要になるかもしれない。

朝日が赤レンガの家々に反射し、ほのかな黄金色を発している。今朝方も夢を見ていた。

夢の中で私は、小中高時代の友人と少しばかり喧嘩をしていた。喧嘩の発端はとても些細なものだったように思う。他の友人を含め、私たちは旅館に泊まっていて、彼と仲直りをしようと思って旅館の食堂で彼に話しかけた。私は自分の非を認め、彼に誤った。彼も自分の非を認めていながらも、なかなか謝罪の言葉を述べることはなかったが、そうした彼の行動も自分は受け止めていた。

そう、喧嘩の発端は、彼が私にくれた弁当の中に埃りか何かが入っていたことだったように思う。その弁当は彼のお母さんが作ってくれたもののようであり、埃りについて指摘したことが、彼にとってみれば、自分の母親が作ってくれた弁当が批判されているように感じられたのだと思う。そのようなことがきっかけで、少しばかり言い合いになったのを覚えている。結果的には、私たちは仲直りをした。そのような夢の場面があった。

次の夢の場面では、私は新幹線の発着駅にいた。駅構内の様子からすると、混雑しているような時間帯であり、乗るべき新幹線の到着時刻が迫っていたので、私は少し急いでいた。

新幹線乗り場に向かう改札口を通ろうとすると、いつもとは異なり、自動改札機がなく、切符を係員に手で渡す必要があった。私は自分の切符を女性の係員に見せたところ、「切符の署名欄への記入をお願いいたします」と無愛想な顔で言われた。それに対して私は、「わかりました。すぐに署名します」と述べて、その場で署名をしようとした。すると、「署名は切符の購入機の前で行ってください」と言われた。私は急いでおり、またその場で署名することは他人に迷惑をかけることでもなく、すぐに終わることでもあったので、その係員が述べたことには納得できないものがあった。その理由に

ついて尋ねてみると、これまた無愛想な表情で、「それは規則ですから」と言われた。それを聴いた時に、「規則を守ることしか考えられない典型的な日本人だな」という言葉が喉元まで出かけたが、その言葉を述べることをグッとこらえた。その代わりに、目の前で規則を破ってやろうと思い、私はその場で適当に署名をし、強引に改札口の向こう側に出て行った。女性の係員はもはや自分を止めることはできなかった。

すると不思議なことに、私の意識は彼女の心の内を見透かしており、彼女の心の声が聞こえてきた。その声の内容は、これまでは規則を絶対のものだと思っていたが、状況に応じて規則を逸脱した行動を取ることが許容される場合もあるということを理解した、というものだった。その声を聞きながら、私は新幹線乗り場に到着した。すると、自分が乗る予定だった新幹線はすでに到着しており、慌てて乗ろうとすると、目の前でドアが閉まった。

動きだす新幹線を見守りながら、次の新幹線に乗ることにした。次の新幹線は20分後と比較的早く到着するらしかったので、新幹線を乗り損ねたことに対してそれほど落胆の気持ちはなかったが、あの係員とのやり取りがなければ予定通りの新幹線に乗れたのにとも思った。しかしながら、彼女が新たな認識の枠組みを獲得するきっかけになったのであれば、あのやり取りも無駄ではなかったと思った。そこで夢から覚めた。フローニンゲン：2020/4/11（土）07:33

5723. 絶え間ない創作に向けて

時刻は午後7時を迎えた。今、西の空に夕日が燦々と輝いている。日没まであと1時間半ぐらいあろうだろうか。就寝の準備に向けてあとまだ2時間半ある。夕食後のここからは曲の原型モデルの作成と、何か絵画を描きたいと思う。

午後、人間はどれくらいの質のものをどれくらいの量創造できるのかということに妙に関心が向かった。量が質に転化する臨界点を何度も超えていこう。

発達の螺旋階段を愚直に登っていく。登っていく方向が見えなくても、登っているようでいて停滞や退行が生じていたとしても歩みを止めることはない。

作曲の学習と実践の合間に休憩として絵画を描いていく。寛ぐために絵画を描くことにする。

絵画は寛ぎをもたらしてくれる。それは創造に伴う癒しの力だと言えるだろうか。この癒しの力が変容の力にもなるということ。それを絶えず念頭に置いておく。

創造するために創造することを通して自己が寛いでいく。創造と寛ぎの中で、作曲と絵画の創作を行き来していく。できる限り全ての時間を創作に充てたらどうなるのだろうか。そのようなことを考えた。

他者や社会に惑わされず、自分の全ての時間を創作活動に振り向けていく。まだ無駄な時間がある。毎日の時間からそうした無駄を徹底的に排除し、それによって生み出された時間を全て創作に振り向ける。目にするもの、耳にするもの全ては、自分の肥やしにつながるものだけにする。世の中には肥やしにつながらないようなもので溢れているのだから、細心の注意が必要である。

夕方に近所のスーパーに出かけた。途中、河川敷にマットを敷いて、そこで日光浴を楽しんでいる人たちの姿を見かけた。スーパーに到着すると、今日はいつも以上に列ができていた。昨日に引き続き、明日と明後日は祝日とのことであるから、その前にみんな買い物にやってきたのだろう。

夕日を浴びながら列で待っている最中もずっと、頭の中は音楽と絵画のことで一杯だった。昨夜は、ベッドの上で自画像を頭の中で描いていた。スーパーの帰り道は、脳内に楽譜を生み出し、そこで音を実験的に並べていた。プロ棋士が脳内に碁盤を思い浮かべ、いつどこでも将棋や囲碁を行うかのように、数学者が脳内に数式を思い浮かべていつでもどこでも数学を行うかのように、絶えず作曲や絵画の創作を行っていく。

夕食を作っている最中、フローニンゲン大学で創造性の発達について学習していた意味とその導きに遅まきながら気づいた。それは全て作曲と絵画の創作のためにあったのだ。アメリカから日本に一度引き上げたこと、そしてそこからオランダにやってきたことの深層的な意味が見えてきた。

作曲と絵画の創作の2つの領域で1万時間の法則を適用していこう。現在の時間の使い方をより突き詰めていけば、2つの領域で1万時間の法則を数年以内に実現させていくことはそれほど難しくない。おそらくは、1万時間の法則を超えた後から真の創作が始まる。それまでは単なる準備である。脳の可塑性を最大限に発揮するために意識状態や心身の状態を絶えず整えていく。脳の可塑性を大いに発揮することができれば、後発的な形で始めた2つの実践においても、自分が望むような

© YOHEI KATO 2020

境地に必ず到達できるはずである。これまで学んできた発達科学の知見を全て自分に適用していく。今日はまだ就寝まで時間がある。1日を創作で終え、1日を創作で始めていく。フローニンゲン：2020/4/11（土）19:25

5724. この1年間の食実践を振り返って：神通力と活力の獲得

今朝は午前4時半前に起床し、今、時刻は5時を迎えた。朝、小鳥たちに「おはよう」の一言を述べようと思ったが、小鳥たちはまだ鳴き声を上げていなかった。今もまだ彼らは眠っているようだ。

おはようの挨拶を誰にもすることなく、今日もまた新たな創作の1日が始まった。創作で終わり、創作で始まる毎日。こうした日々を過ごせていることの幸福を思う。

今日もまたフローニンゲンは天気が良いようだ。しかし明日からは気温が下がり、曇りとなるらしい。明日と明後日は、最高気温が2分の1ほどになり、10度を下回るという予報が出ている。そこからまた最高気温が15度前後、最低気温が5度前後となり、このくらいの気温の日々が長く続くだろうと予想される。

食実践を大きく変えてから1年がいつの間にか過ぎていた。食実践を大きく変えるきっかけになった昨年3月のパリ旅行からすでに1年以上が経過していたのである。とりわけ、この10ヶ月においては、魚はおろか、肉類は一切口にしていない。毎日固形物としては、リンゴ1個、バナナ1本、バイオダイナミクス農法で作られた4種類の麦のフレークを少々、ジャガイモ（中）2個、サツマイモ（小）1本、玉ねぎ（小）1個、椎茸（中）2個しか食べてない。

これらの食材で実は大抵の栄養素をカバーしているのだが、それらでまかないきれないもの（例えばプロテインなど）はヘンプパウダーやカカオパウダーなどで補っているように思う。固形物ではないが、油や味噌にもこだわっており、油に関してはオーガニックのヘンプオイルとココナッツオイルを摂っており、味噌も有機味噌を摂っている。朝にベジブロスを用いた具なしの味噌汁を飲んでいるのだが、その時には八丁味噌を使い、夜にモリンガパウダーと和えた形で味噌汁を作る際には、玄米味噌を用いている。夜の味噌汁に関しては、液体性を抑え、茹でたジャガイモと混ぜることによって半液体･半個体の食べ物として味わっている。

そのような食実践をこの10ヶ月ほど続けてみると、嘘のように心身の調子がいい。心身に新しい羽が生えているような感覚であり、心も体も軽い。そして何より、知覚が研ぎ澄まされ、神通力のようなものが獲得されつつあることにも気づく。まさに、「臼井靈氣療法」の創始者である臼井甕男がかつて、京都の鞍馬山にこもって断食をし、そこで治癒的霊力を得たのと似ている。

自分の身体エネルギーの活力の観点からすると、17歳ぐらいの身体年齢だと今まで思っていたが、自分の発想が貧困であり、よくよく観察をしていると、そんなに歳をとっていないことに昨夜気づいた。自分の身体エネルギーの活力は、おそらく6～7歳ぐらいの爆発力を持っているように思う。

昨日の夕方に、自分の身体エネルギーはまだまだこんなものではないはずなのにと疑問に思っていたところ、これまでの自分が17歳と思い込んでいたことが原因だったことに昨夜気づいたのである。そうした気づきを得て、昨夜から自分の身体エネルギーの若さ及び活力は、6～7歳の時の自分のそれであると認識するようになった。今日からはそうした若さと力強さを持ったエネルギーを携えて生きていく。そうしたエネルギーをもとに日々の創作活動に従事していく。フローニンゲン：2020/4/12（日）05:30

5725. デジタル空間内の無限大の美術館･音楽館の創出に向けて

時刻は午前5時半を迎えた。この時間帯になってようやく小鳥たちが鳴き声を上げ始めた。外はまだ闇に包まれていて、彼らの姿は見えない。これからもうしばらくすると、空がダークブルーに変わり始め、正式に夜が明ける。

数日前に、この四半期の会計報告をかかりつけの会計士に行った。ハーグに住む日本人の友人からその会計士を紹介してもらった。彼の名前はロブという。ロブに会計報告をする際に、コロナウイルスに罹っていないかを含めた安否を確認したところ、彼を含め、家族全員無事とのことであった。それを聞いて一安心し、ロブがこの四半期の会計報告をすぐさまレビューしてくれた。ロブの仕事の早さに感謝をしたのは数日前のことだった。

狂気さに至り、狂気さを超えていくこと。そのことについて昨日も考えていた。狂気さもまた段階的なプロセスを辿るのだろうか。ひとっ飛びに狂気さを超えていく道もあるような気がしている自分がそこ

にいた。すなわち、狂気さを介在させることなく、それでいて狂気さに至ったのと同じ感覚を獲得しながらにして狂気を超えた世界に参入していく道である。

狂気超越的な世界に向けてすでに歩みを始めている自分がいるように思える。その歩みは止まることがなく、また止めるつもりもない。

無生物の中にも輝きと命を見出すこと。それを曲や絵の形にしていくこと。その点をまた大切にしたいと昨日思った。現実世界及び想像世界の中の生き物だけではなく、生き物以外の存在者にも固有の輝きと生命的な何かが必ずあるはずであるから、それらを曲や絵の形にしていくのである。その思いを忘れないようにしよう。

その思いをもとにして作った作品をもとに、自分の美術館･音楽館をデジタル空間内に構築していこう。デジタル空間上であれば土地代はいらない。所蔵スペースも関係ない。そこでは無限大を実現させることができる。無限なるものと永遠なるものへの憧憬の念は、肉体的生命の有限性に対する影か。いやそれとも光か。

デジタル空間上で曲や絵画を作ることは、比較的現代に生まれた特殊な知性領域および能力領域なのだということを昨日の午前中に考えていた。当該領域の課題は、物質次元で曲や絵を作るのとはまた違った課題性を秘めており、デジタル空間上での創作に固有の課題の性質が何かを見極めていく。また、そうした課題に紐づいた特殊な技術を特定し、それを涵養していく。デジタル空間上での創作活動に固有の課題と技術さらには知性が明らかになり、実際の創作活動を通してそれらの課題に取り組み、技術と知性を涵養していけば、自分なりの創作方法が自ずから生まれてくるだろう。その発見に向けて、今日もまた愚直に創作活動に取り組もう。

小鳥たちが朝の挨拶をしている。彼らの鳴き声を聞きながら、創作に没頭する1日がまた新たに始まったのだと知る。フローニンゲン：2020/4/12（日）05:47

5726. 作曲と絵画の相思相愛関係

時刻は午前6時を迎え、空がダークブルーに変わり始めた。早朝オイルプリングをした後に飲む白湯を飲み干し、その後に飲むチアシード入りの小麦若葉のドリンクも先ほど飲み終えた。今からゆっ

くりと大麦若葉のパウダーを白湯に溶かしたものを飲む。毎日どの時間帯に何をどれだけ飲み食いするのかがシステム化されており、今の自分はそのシステムに沿って飲み食いをしている。そのシステムから外れたものは一切口にしていない。今日もそうした1日になるだろう。

先ほど、2枚ほど絵を描いた。描きながらふと気づいたのだが、自分はどうやら円の図形を好んでいるようなのだ。無意識的に円をサッと描く癖がある。そのようなことに気づいた。

ピタゴラスが取り憑かれたかのように三角形を描き、かの有名な定理を発見したのと同じように、自分も円を描き続けていけば何か発見があるだろうか。もちろん、期待しているのは数学上の発見ではない。自分に関する発見だ。自分の内面宇宙に関する新たな発見があればと思う。それは人間の内面宇宙に関する立派な発見なのだから。

今日もまた作曲実践を行う無上の喜びがある。作曲実践の合間合間に休憩として絵を描いていく習慣を持ちたい。もちろん、休憩として脳を休めるかのように瞑想実践的なことをするのは大切だろうが、自分にとっては絵を描くことが良い瞑想実践のように思える。この点は不思議であり、作曲中は絵画の創作のための瞑想実践に作曲がなり、絵画の創作中は作曲のための瞑想実践に絵画の創作がなる。このあたり、作曲と絵画の創作の相性はすこぶる良く、相思相愛関係が育まれつつあるように思う。この関係性を大切にし、より太く大きく育んでいこう。

自分の内側にどのような音が眠っているのかを探るために毎日曲を作っているのと同様に、自分の内側にどのようなイメージが眠っているのかを探るために、絵を描いていく。内的イメージをくまなく探索し、それを絵の形にしていく。絵日記を描くかのように、日々の何気ない事柄に喚起されたことを絵にしていく。絵日記と音日記の創作。絵日記と音日記の創作を通じて、デジタル空間内に無限大の絵と音の大伽藍を建築していく。その点において言えば、建築家的な側面も持ち合わせておきたい。

昨日の作曲実践を振り返っての気づきを書き留めておく。昨日も、作曲家と対話をするように原型モデルや譜例を参考にして曲を作っていた。作曲家との対話の精神を忘れることなく、それを今日も行っていく。原型モデルを作る過程においては、作曲家が体現していた身体感覚に沿って音を

作曲ソフト上に置いていく。それが彼らの身体感覚のトレースにつながり、そしてそれは作曲という固有の実践領域における身体感覚の開発に結びついていく。

譜例を参考にする際には、そこで感動体験を忘れないようにする。プロ棋士が棋譜並べの中で、ある一手に美しさを見出し、感動の心を持つように、譜例を参考にする際には一音に美しさを見出し、感動の心を絶えず持っておく。メロディーやハーモニーの美しさのみならず、楽譜の中に視覚的、つまり絵画的美しさを見出したり、それらを超えて、音の背後にある作曲家の実存的美しさにも注目していく。今日のこれからの作曲実践が実に楽しみである。フローニンゲン:2020/4/12(日)06:20

5727. これからの旅の楽しみ:今朝方の夢

今度のアテネ旅行から絵画の創作ができることを本当に嬉しく思う。まだiPad Proのカバーケースが届けられていないが、それはアテネ旅行の出発には十分に間に合う。アテネ旅行の最中は、きっと何度も心が動かされるはずである。それを逐一絵にしていく。もちろん、それは作曲の源泉にもなる。

旅行中の移動の際にも作曲は比較的容易に行えるが、絵画の創作はiPad Proのおかげでもっと楽だ。本当にいつでもどこでも絵を描けてしまう。アテネの空港やアテネ市内のカフェ、美術館の前や中など、どこでも絵を描くことが可能だ。iPad Proを購入したこと、及び絵を描き始めたことによって、これからの旅の充実感はより一層深まるだろう。今から今後の旅が楽しみである。

穏やかな潮騒と小鳥たちの鳴き声。パソコンから波音の音楽が聞こえてきて、書斎の開け放たれた窓からは小鳥たちの鳴き声が聞こえてくる。それらの音は、絶えず自分を観想的な意識にしてくれる。そうした意識状態の中で創作活動に励んでいく。

そう言えば、今朝方の夢についてまだ振り返りをしていなかった。その振り返りをし、その後、早朝の作曲実践に入りたい。

夢の中で私は、実際に通っていた高校にいた。どうやらこれから体育の授業があるらしかった。教室にいる生徒の数は少なく、ちょうど私の近くに、小中高時代の女性友達(NI)がいて、彼女と少し

話をしていた。彼女は地元生まれで地元育ちのはずなのだが、ちょっと違う場所の方言が混じっているように思えた。彼女が発した「体育」という言葉のニュアンスからそれを察したのである。

体育の授業に参加するために、体育館に向かおうとしたところ、見慣れない先生が私に声をかけてきた。どうやら国語の教師らしい。その女性教師から、1枚の答案を渡された。見ると、それは先日受けた模擬試験の答案だった。

どうやらこの学校には国語教師が複数人いるらしく、そのうちの男性の先生がその模擬試験を作問したらしかった。その男性の先生は、私に期待していたらしく、てっきり自分が1番を取るものだと思っていたらしい。私は国語に関して1番を取る気は全くなく、ましてや学内試験の成績など正直どうでもよかった。そうした思いは口にせず、答案用紙を受け取ったところ、思っていた以上に点数が悪かった。それでも国語の成績は学年で3番ぐらいのようだった。

模擬試験の最中を思い出すと、問題を解きながら悪問ばかりで楽しくないなと思っていたのだが、それもそのはずで、あの先生が作問したからだったのだと思った。その先生に対して言いたいことはあったが、目の前にいる女性の先生にそれを述べても意味がないだろうと思い、私は受け取った答案用紙を机にしまい、体育館に向かった。

体育館に向かう最中も、国語の先生についてあれこれと考えていた。そうこうしているうちに体育館に到着した。体育館に到着するや否や、体育教師が何やら高圧的な態度で生徒たちに指示をしていた。本当に呆れてしまう。体育教師の無能さには本当に呆れる。そのようなことを思いながら、無能なのは体育教師だけではなくあの国語教師も同じであると思った。

体育館の入り口で、この学校の教師は馬鹿ばかりであることを改めて思い、高校なんて行くもんじゃないと思ったところで夢から覚めた。夢から目覚めると、自分の身体の内側に少しばかり攻撃的なエネルギーが流れていた。天井を見つめながら、そのエネルギーが静かになることを待った。エネルギーが落ち着いた後にベッドから体を起こし、寝室から出た。

寝室から出た後も、教師の無能さについてぶつぶつ独り言を述べている自分がいて、高校そのものの存在意義を改めて問うている自分がいた。現代社会の特性などを踏まえると、自分の場合は、中学校を卒業するまでで十分、もしくは小学校に通うまでで十分だったのではないかと思った。

© YOHEI KATO 2020

学校は、ある一定程度の能力水準･知性水準を持った人間を製造することには適しているが、それ以上の人間を育むことにはあまり適していないように思えるのは自分だけだろうか。現在作曲において参考にしている巨匠において、時代背景もあるだろうが、モーツァルトなど小学校にすら通っていない。学校に通うことによって矮小化される道を進むのか、学校に通わずにして巨人になる道を進むのか。

今後の教育はどのようになっていくのだろうか。現代人がひどく小粒になってしまった1つの要因には、間違いなく学校の存在が挙げられるような気がしている。学校不審の観点から学校教育を考えていくことにも何かしらの有用性があるだろう。むしろ、学校の存在が当たり前だと思っている現代社会においては、なおそうした観点が重要なのかもしれない。フローニンゲン:2020/4/12(日)06:46

5728. 危機察知能力

時刻は午後7時半を迎えようとしている。今、穏やかな夕日がゆっくりと西の空に沈んでいこうとしている。昨夜に気づいたことだが、すっかり日は伸びて、就寝準備を始める午後9時半においてもまだ完全に真っ暗になっているわけではなかった。これからあと2時間ほどは明るさがある。

今日は夕方に、協働プロジェクトの一環として、依頼を受けていたアセスメントのレビューを行った。今日は少しばかり創作活動に関して休息が必要かと思う瞬間があり、アセスメントのレビューの仕事は、大変良い気分転換になった。このように複数の領域に実践があることは救いであるとさえ思えた。

救いに関して言えば、絵画を描くことを通じて同じような救いが得られている。それは作曲とは異なる治癒だと言えるかもしれない。作曲実践と絵画の創作ではどうやら活用する脳の部位が異なるらしく、知性の発揮のさせ方も異なる。そうしたことから、両者の領域を行き来することはとても良い調和を自分の心身にもたらしてくれる。今夜も心身を寛がせるためにまた絵を描くかもしれない。

午前中に書斎の窓辺に近寄って外を眺めた時、隣の家のニコさんの庭に目がいった。特に、鳥の餌箱に目がいった。というのも、そこで面白い光景を目にしたからである。端的には、スズメとハトが仲良く餌を食べていたのである。

微笑ましい光景としては、その餌箱は小さいため、スズメが餌箱をつつき、溢れた餌をハトが食べていた。地面にこぼれた餌に関しては、他のスズメとハトが近づきあいながらも決して餌を奪い合うことなく、仲良く食べていた。厳密には、仲良くというよりも、彼らはお互いをあまり気にしていないようだった。

スズメとハトが共存できることが非常に面白かった。スズメからしてみれば、自分の体の5~6倍ほどの大きさのハトが近くにいても逃げることなく、何食わぬ顔で餌を食べていることはすごいことではないだろうか。私たちが自分の身長よりも5～6倍ほど大きい動物に出くわしたら、少し身構えてしまうように思う。もちろん、人間のように知性があれば、仮にそうした大きさの生き物が草食動物だとわかれば問題ないだろうが、果たしてスズメたちにそのような認識力があるのかを考えた。

観察を続けていると、ひょっとすると体の大きさ云々というよりも、その個体が発するエネルギーの質感をスズメたちは察知しているのではないかと思った。ハトのエネルギーはスズメにとっては無色のようなものであり、猫や人間などはちょっと違う色が付いているのかもしれない。そうしたエネルギーの質感の違いによって、近づく対象が危険な存在なのかどうかを把握しているように思える。そうした危機察知能力がスズメにはありそうなのだが、果たして私たち人間はどうだろうか。そうした動物的な危機察知能力を弱体化させ過ぎてはないだろうか。こうしたご時世において、自分の身は自分で守るという意識とそうした危機察知能力は大切なように思える。そうしたことをスズメから教えてもらった。フローニンゲン:2020/4/12(日)19:31

5729. 日々の小さな前進

時刻は午前6時を迎えようとしている。今、うっすらとだが、空がダークブルーに変わり始めている。

今日から新たな週を迎えた。先週と同じようでいて、異なっている雰囲気。先週と異なっているようでいて、同じような雰囲気。そうした相反する雰囲気に包まれている自分がいる。今週も自分の取り組みを少しだけ前に進めていこう。気張る必要はなく、毎日少しだけ前進していけばいいのである。

昨日までは暖かい日々が続いていたが、今日と明日は気温が下がる。今日の最高気温は8度とのことであり、日中は太陽が出るとのことだが、それでも気温は上がらない。明日もまた同じような気温であり、明後日からまた少し暖かくなる。

一昨日や昨日に考えていた雑多なことを改めて言葉の形にしておこう。早朝の作曲実践においては、毎朝最初にコラールを1曲作ることにしていたが、その曲の調を変えて様々なことを試すためにもう1曲ほど準備運動としてコラールを作ってみようと昨日思った。バッハのコラール、とりわけ4声のコラールを参考にしてから早くも1年半経っていることに昨日気づいた。まだ参考にしていないコラールが50曲ほどあり、今1日に2曲ずつ参考にしているから、来月あたりで一通り全てのコラールを参考にしたことになる。総数は、2声のコラールが69曲、4声のコラールが371曲であった。

若かりし頃のルドルフ･シュタイナーが、カントの『純粋理性批判』を何度も繰り返し読み込むことで哲学的思考の基盤を築き上げていったように、バッハの楽譜を何度も参考にすることで作曲上の思想的･技術的基盤を確立していこう。

バッハの音楽の何かが自分を捕らえ続けている。それが一体何なのかは、バッハを参考にし続けることでしか見えてこないだろう。

毎晩夕食後に、範を求めている何人かの作曲家の曲を参考に、曲の原型モデルを作成している。そしてその翌日にそのモデルを用いて、あれこれ実験的に曲を作っている。全ての原型モデルが自分を打つものだとは言えず、自分を打つものに関して言えば、それを何度も繰り返し活用していくことを考えてみよう。それを用いて多様な実験をしていくのである。

仮に今後もう少し長い曲を作ろうと思った時においても、今の鍛錬はきっと活きてくるはずだ。短い曲を無数に作ることを通じて、自分の好む音を見出していく。またそれを音の宇宙から自分の手で刻み出せるようにしていく。

作曲を始めたのは30歳を過ぎてからであったし、絵画の創作を始めたのはつい最近だ。それらを始めるのを待った自分がいたのか、待たされた自分がいたのかはわからない。ただし、それらの実践に乗り出していくためにそれだけの年月がかかったことだけは間違いない。そして、それだけの歳月は決して無駄ではなかったことを知る。

© YOHEI KATO 2020

少しばかり強い風が早朝のフローニンゲンの街を吹き抜けていく。その風に小鳥たちの鳴き声が乗っている。フローニンゲン：2020/4/13（月）06:11

5730. 今朝方の夢

今朝方は午前3時に1度目を覚ました。だがそこで完全に起床するのではなく、トイレを済ませてからあえてもう1度眠りについた。目覚める前に見ていた夢の続き、あるいはまた別の夢が見られると直感的に思ったからである。

夢の中で私は、大学時代のサークルのOB会のようなものに参加していた。フットサルの練習をした後だったのか、なぜか私たちOBは、コート脇の自販機の前にたむろしていた。学年がバラバラのOBたちがそこに集っており、多くは私が入学したときに上の学年にいた先輩たちだった。

1度全員で輪になって話をしようということになったのだが、同じ学年のあるメンバーが、自販機の前で真剣な表情をして大量のエネルゲンを購入している。缶やペットボトルの様子からすると、それはポカリスエットでもアクエリアスでもなく、間違いなくオレンジ色のエネルゲンだった。友人は一体誰にそれを配ろうとしているのだろうかと思うぐらいに、大量のエネルゲンを両手一杯に購入していた。彼がエネルゲンを購入し終えてから全員で話始めようと私たちは暗黙の了解で思っており、その場にいた全員が黙って彼を待っていた。

すると、彼は一向にエネルゲンを購入することをやめる気配がなかった。それを察してか、ある先輩が私のところに歩み寄ってきて、私に話しかけてきた。その先輩は私よりも1学年上であり、大学を卒業した後に名門投資銀行に就職し、そこでM&Aなどの業務に従事していた。その先輩と一緒に地べたに座りながらお互いの近況について話し始めると、先輩は突然英語を話し始めた。先輩は大学3年生ぐらいから真剣に英語を学び始めたのを私は知っており、卒業後、インベストメントバンカーとして英語を活用してきたのだろうと思われるぐらいに英語が流暢だった。あの独特な日本語訛りがほぼ消えていて、その流暢さには私も驚いてしまうぐらいだった。

すると、私の左横にまた別の先輩が座っていて、その先輩が「英語なんて話すなよ」と英語で話した。その先輩は私よりも3つ学年が上であり、その先輩は学部を卒業した後も大学院に残っていたので、かなりの時間を一緒に過ごした。その先輩は金融工学を専攻していて、卒業後は大手の邦

銀に就職し、そこで自分の専門性を活かした仕事をしているようだった。その先輩もまた数年間ほどロンドンに駐在経験があったのだが、その先輩曰く、ビジネス上の大事な話は全て通訳をつけていたと述べており、また家族と一緒にロンドンに行ったためか、英語がそれほど上達しなかったとのことである。確かに、私の右横にいる先輩と比べてみると、英語力の差は明らかだった。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は遊園地の探検型アトラクションの世界の中にいた。そこで大学1年生の時に仲良くなった友人(TY)と遭遇し、彼が面白い乗り物に乗っていたので、その乗り方を教えてもらった。フリスビーのようなディスクからUFOのような円盤形の乗り物が現れ、それは海の上をホバリングすることもできるし、空を飛ぶこともできた。そんな乗り物の乗り方について彼から教わった。

誰かがその乗り物が収められているフリスビーのようなディスクを乱暴に扱ったためか、UFOのような円盤になった際に、少々傷が見られた。それによって、思うような操縦ができないとのことだったが、彼の操縦技術は見事であった。

しばらく彼から操縦に関するレクチャーを受けた後に、再びアトラクションの世界における探検を続けようと思った。ある箇所に到着した時に、そこから先は、ある敵のようなキャラクターと戦い、それに勝利しないと先に進めないことになっていた。私はそのキャラクターと戦う気が全くなく、そのキャラクターを倒さないと先に進めないのであれば、もうこのアトラクションから外に出ようと思った。そう思ったところで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2020/4/13(月)06:30

5731. 今朝方の夢の続き:忘れられたものを取り戻すために

時刻は午前6時半を迎えた。ここ最近はこの時間帯になると朝日が昇り始めるのだが、今日はちょっと曇っているためか、少し薄暗い。室内では明かりをつける必要があるほどの暗さだ。

小麦若葉のドリンクを飲み干し、次に大麦若葉のドリンクを飲もうと思って、レンジを使ってまずは白湯を作ろうと思った。白湯が出来上がるまでの短い時間、書斎の窓辺に近寄って、外をぼんやりと眺めていた。目に入ったのは赤レンガの家々だった。赤レンガの家々を見てみると、明かりが灯っている家が一軒もなかった。そう言えば、いつも私が起床する時間は外の世界が真っ暗であり、ど

の家も明かりが灯っていないことに気付いていた。ひょっとすると私は、大抵毎日、この街の誰よりも早起きをしているのかもしれない。

誰よりも早く起床し、誰よりも愚直に自らの取り組みを前に進めていくこと。それを日々行っている自分がいるような気がした。だが、そもそも「誰よりも」という形で他者と比較する必要などないのであるということにも気付いた。自分は自分固有の人生を生きているのだから。

他者が混入する比較級が内包された構文の遡上に言葉を乗せるのはやめよう。そのような構文を用いて生きようとするのは、よほどの馬鹿か、自らの固有の人生を生きていない者だけだろうから。

夜が明けぬ早朝未明に、今日もまた音楽を聴きながら短い時間だが踊りを踊っていた。すると、何かが自分の心に触れ、突然涙が溢れてきた。涙を誘ったものが何だったかを探ってみると、夢の中の心象風景と同時に、人間の生きる姿に心が打たれたようだった。

とても何気なく、それでいてとても尊いこと。家族を持つということ。子供を育てるということ。それらの何気ないことがとても尊いことのように思われ、神妙な気持ちになってしまったのだ。突然溢れ出した涙を拭った時、私はまた独り書斎にいた。

先ほどまで夢について振り返っていたように思う。午前3時に1度目覚めた後に再度眠りの世界に戻ってみた時に見た夢についてはまだ書き留めていなかった。それらの夢についても書き留めておきたいと思う。

夢の中で私は、奇妙な生活空間にいた。それは奇妙としか表現できないほどの、一風変わった生活空間だった。複数の店が一か所に集まっており、その居住空間においては、生活上必要なものが全て揃うようになっていた。私は美容室に行って髪を切ってもらおうと思っていたのだが、今回はかかりつけの美容師が海外旅行に出かけており、彼の店は閉まっていた。そうしたことから、今回は別の美容室に行こうと思った。

美容室に到着すると、本日自分の髪を切ってくれる女性が現れた。見るからにしてパワフルな女性であり、後々話を伺ってみると、彼女はアフリカ系イギリス人とのことだった。だが、彼女の家系は一般的な欧米人と同じく非常に複雑であり、先祖を辿ると、祖先はいろんな国の人のようだった。一応

彼女の国籍はイギリス人とのことだが、外見や雰囲気を含め、あまりイギリス人という感じがしなかった。彼女の祖先には日本人もいたようであり、幼少期の頃に日本で少し過ごしたことがあったそうであり、彼女の日本語はとてもうまかった。彼女の第一印象から力強さを感じただけではなく、とても優しい人なのだという印象を受けた。しかしながら、彼女の店は相当に繁盛しており、そのせいか、彼女は少し苛立っているように思えた。

散髪台に案内され、席に腰掛けたところ、切った髪が服にかからないようにするためのエプロンのようなものをかける素振りを見せず、彼女はいきなり私の髪を切ろうとした。実際には、最初のハサミが入った。私は、あのエプロンのようなビニールをかけてくれと彼女にお願いしたところ、とても面倒臭そうにそれを取りに行った。彼女のそのような態度に違和感を感じ、さらには最初にハサミが入った瞬間に、何か心がこもっていないように感じ取られてしまったのである。そうしたことから私は、髪を切ってもらうことをせず、もうそこで帰ろうかと思った。

もう帰るという旨を彼女に伝え、髪を切ってもらってもいないのに、代金だけはきっちり請求された。その生活空間には今はいないかかりつけの美容師の店以外に他に美容室がなく、それもあって、私は最後まで彼女に髪の毛を切ってもらうことにした。

髪を切る方も髪を切ってもらう方も、お互いに気分良くいることが大事かと思ったので、私は冷静になって、彼女の話を聞いてみることにした。すると、見る見るうちに彼女の苛立ちは消えていき、最初に私が思っていたように、彼女がとても他人思いの優しい自分であることがわかったのである。そこから私たちはお互いに打ち解けながら会話を楽しんだ。そこで夢の場面が変わった。

最後の夢。それが妙に心に残っていて、起床直後の涙を誘発したのもこの夢が一因だったのではないかと思う。

夢の中で私は、その夢の半登場人物であり、同時に半観察者だった。その夢は大学時代の女性友達に光が当てられていて、私はその夢の中にいながらも、同時に彼女の生き様を眺める者でもあった。

ひょんなことから彼女は地元に戻り、第二の人生を生き始めたようだった。大学卒業後しばらくしてから結婚し、子供をもうけたが、夫婦のすれ違いから離婚をしたようだった。離婚後しばらくして彼

女は地元に戻った。彼女の住んでいる場所はとても長閑なところであり、冬は雪が積もる。春には、厳しい冬を乗り越えた生命たちが躍動する。そんな場所に彼女は住んでいた。

私は夢を眺める者として、彼女の生活風景を見守っていた。片親として子育てをしながら仕事を含め、孤軍奮闘している姿には心打たれるものがあった。大学時代の彼女を知っている自分としては、彼女がこのようにたくましく生きられるとは思ってもいなかったのである。

季節はまだ雪解け前のようであり、彼女は可愛らしい男の子を幼稚園に連れていくために、その子を自転車の後ろに乗せて田んぼ道を走っていた。私の耳には2人のやり取りが聞こえてきており、彼女の息子に対する言葉掛けは、彼を立派な人間にすると思わせてくれるものだった。

彼女がこのような田舎で生活をしていることが自分にはあまり信じられなかった。数年前に一度、彼女と話をしたことがあった。その際には、今の会社に残っていれば安泰であり、何か特別な仕事をしなくても、1500万円ほどの年収が得られると述べていた。そのような発言をした彼女に対して私は、そんなはした金のために会社に残って人生を無為に過ごすのは馬鹿げていると述べたことを覚えている。自分の人生という貴重な時間をその程度のカネに明け渡してはならないと伝えたのである。そんなやり取りがあったのを思い出しながら、私は彼女が一生懸命に子育てをし、自分の取り組みに従事する姿を見守っていた。

現在の彼女は何をしているのだろうか。それが気になっていた。彼女は大学時代に非英語圏に留学をしており、英語に以外にも外国語が扱える。そんな彼女はさらにそこからイタリア語を学び始めたようであり、現在はイタリア語を使った仕事をしているようだった。それ以外にも、私が最も驚いたのは、彼女がイラストレーターとして活動していることだった。

時間が巻き戻され、夢を眺める者としての私は、彼女の幼少時代の出来事を眺めていた。彼女は幼少時代から様々な才能に恵まれていたようであり、いろいろな表彰を受けているようだった。その中でも、彼女は絵に関して1度世界的に有名な賞を得ているようだった。その賞の名前は「マジャール賞」というらしい。最初その名前を聞いた時、数年前に訪れたブダペストの街並みが思い出された。そこにいるハンガリー人、つまりマジャール人の姿が想像されたのだ。そうした連想の世界に

浸った後、再び私は彼女の幼少時代の出来事の世界の中にいた。そこで彼女が、無限大に絵を描こうとしていたことを知って驚いた。驚きと共に多大な共感の念がそこにあった。

彼女が幼少期に描いていた画用紙や自由帳のようなものが大量にあり、私はそれらを眺めていた。その中に一つ、未だ完成していない1枚の絵があった。どうやら彼女はその絵を完成させるために地元に戻ってきたのではないかと私は思った。

失われていたもの。幼少時代に情熱を注いでいた忘れられたものを、もう一度取り戻すために彼女はここにいるのではないかと思った。そう思った瞬間に、再び私は現在の彼女の生活を眺める者になり、彼女が子育てに孤軍奮闘しながら、新たな人生を懸命に生きる姿がまた目に飛び込んできた。すると妙に心を揺さぶる音楽が流れてきて、私は目を覚ました。フローニンゲン:2020/4/13(月)07:22

5732. 人類絶滅後の知的生命体の会話を聞いて

人類絶滅後の知的生命体の会話が、どこからともなく聞こえてくるかのようだ。

早朝の作曲実践をし終えた後、少しばかり物思いに耽っていた。いつか自分がこの世から消えるということが確実であるというその確実性に黙ってしまった。

いつかテクノロジーがさらに進歩を遂げ、肉体と脳を切り離すことによって、より寿命が伸び、さらにはいつか、意識そのものの抽出及び保存が可能になったとしても、いつか人類という種は滅びてしまうのではないかと思った。そのようなことを考えていると、いつか母方の叔父とどこかの街を散歩していた時のことを思い出した。あれは東京だったか、大阪だったか。その時の叔父の話が妙に印象に残っている。

叔父は大学時代に家庭教師をしていたことがあるらしく、教えていた高校生がある時からどこか変だということに気付いたらしい。何やらその高校生は宇宙人と交信ができると述べ始めたとのことだった。少し様子がおかしいなと思っていたところ、それからしばらくしてその高校生は踏み切りで自殺をしたとのことだった。

私たち人間は今、例えば絶命した恐竜や原始人などを研究したりしている。現代人から見たら、恐竜などの知性はやはり人間よりも低いとみなしがちなのではないだろうか。実際に多くの恐竜は、動物の知性の域を超えることはなかったが、中には共同生活を送っているような比較的高度な恐竜がいたことも知られている。しかしそれでも、恐竜の知性はたかがしれていると私たちは思うかもしれない。であれば、今後数十万年後、数百万年後、あるいは数億年後に人類が絶命し、その後に知的生命体が誕生したとして、しかも仮に人間よりも高度な知性を持っているとしたら、今の私たちをどのように思うのだろうかと気になった。

未来の知的生命体の子供:「先生、かつてこの星に人間という生命体がいたと聞きましたが本当ですか？」

未来の知的生命体の先生:「ええ、本当よ」

未来の知的生命体の子供:「信じられないのですが、人間という生き物がいた世界にはカネと呼ばれるものがあって、人間はそれを貪るように求めて生きていたようですね」

未来の知的生命体の先生:「ええ、そうね」

未来の知的生命体の子供:「しかもカネを求めるために、お互いに殺しあったりしていたということが教科書に書かれています。人間という生命体はそんなにバカだったのでしょうか？」

未来の知的生命体の先生:「ええ、残念ながら、それぐらいにバカだったようね」

人類滅亡後の高度な知性を持つ生命体は、きっと人間の愚かさに驚くに違いない。しかし、共同生活を営んでいた恐竜たちにもきっと愛があり、そこに人間の心を揺さぶるドラマがあったに違いない。私たち人間はとんでもないほどに馬鹿で愚かであるが、人類絶滅後の生命体の心を揺さぶるような生き方をしてみる必要があるのではないだろうか。

未来の知的生命体の会話が聞こえてきた後、顔を上げると、そこには曇り空の世界が広がっていて、微風が吹いていた。心の世界を再度覗き込むと、自分はどうやら踏み切りを渡り切ったことを知った。フローニンゲン:2020/4/13(月)08:43

5733. 独自の音言語と絵画言語の獲得に向けて

うっすらとした雲が空を覆っている。灰色の雲は太陽を遮り、今日は夕日が見えない。天気予報によると、明日も今日と似たような天気になるようだ。今日は午後に少しばかり太陽が照る時間があり、その時間は日光浴を少しばかり楽しんだ。日々の日光浴によって、身体に太陽のエネルギーが宿っている。

就寝前にはベッドの上で、広大な宇宙空間に想像を巡らせて、その広大な空間とエネルギーの授受を行っている。数日前の日記で言及したように、今は宇宙空間さえからもエネルギーを一方的にもらうようなことはしていない。そこには相互互恵関係があり、私からもエネルギーを提供している。

今日もまた、まるで音日記や絵日記を絶えず作っているかのよう創作活動に取り組んだ。音日記や絵日記という表現は正しいように思う。寝食の時間を除けば、ほぼ全ての時間を内的感覚のトレースと形象化に充てている。内的感覚を言葉･音･絵のいずれかの形で四六時中形にしている。こうした生活を続けていく。それによって、自己を救済してみようと思う。そして自己救済から他者の救済につなげていく。

利他的な日々の活動。それを常に心がける。1人の人間の救済を、より多くの救済に結び付けていく。

午後にふと、いついかなる時でも音楽を創り、絵を描きたいという思いから、精神空間内により鮮明な楽譜とキャンバスを構築しようと考えた。ひとたびそれが精神空間内に構築されれば、いつどこで何をしていてもその空間内で音楽と絵を創ることができる。それらのイメージを鮮明にするためには、密教的な修練方法の原理を使えば良いかと思われる。そのようなことを考えた後に、自然言語と同様に、音言語と絵画言語で自由自在に喋ることができるようにしようと思った。

英語の発話と同等、いや母国語の発話と同様の流暢さを持って音言語と絵画言語を使いこなせるようになっていく。そのために、音と絵の創造技術を磨いていく。その実現は、自分なりの発話語法の獲得と等しい。一人一人に固有の発話語法があるように、自分独自の発話語法を作り上げていく。これは早朝に考えていたことにもつながる。

早朝には、自分にしかできない筆使いがきっとあるはずだと思って絵を描いていた。実践を通じてそれを探求していく。探求しながらにして、それを作っていくのである。

今日もいくつかの絵や曲を創り出したが、生み出された絵や曲は、自分の内面世界をくまなく表しているように思う。そこには自分の内的感覚が色濃く現れていて、人柄を含めて、嘘をつくことができないかのようである。自分のありのままが表に現れてくる。それが「表現」という言葉の本源にあるものなのかもしれない。それに加えて、表に現れたものの中には、さらなる発達の可能性のようなものも内包されているように思える。発達後の次の姿は、今この瞬間の中にあり、それは表現を通してより具現化されていくのである。

ふと絵を描きながら、特殊なシンボルを描き、そこに自分のエネルギーを込めて行こうと思った。実はそう思うよりも先にそれを行っている自分がいた。レイキのシンボルは人に明かしてはならないと言われているが、そうしたシンボル的なものを絵の中に込めて、作品に触れてくれた人に何かしらのエネルギーを届けていく。それは曲においても同じである。

絶えず自分のエネルギーを微量ながらでも込めていく。デジタル空間内に構築される音や絵の大伽藍は、巨大なエネルギーの集積体とみなすこともできる。そのエネルギーが何かしらの治癒と変容を促すものであればと願う。そのような思いを持ちながら、今夜もまだ時間があるので、明日に備えて曲の原型モデルを作り、就寝前には再度絵を描きたいと思う。フローニンゲン：2020/4/13（月）19:29

5734. 今朝方の夢

時刻は午前7時を迎えた。昨日に引き続き、今日も曇りがちな1日になるようだ。実際にこの時間帯においても、空全体はうっすらとした雲に覆われている。そのため、朝日を拝むことができない。それでも健気に小鳥たちは鳴き声を上げている。自分も彼らのように、普段と変わらない取り組みに今日もまた従事していく。

今朝方もいつものように夢を見ていた。夢の振り返りを行い、洗濯をした後に早朝の作曲実践に取り掛かりたい。

夢の中で私は、小学校時代に在籍していたサッカーチームが使っていたグラウンドの上にいた。そこでは同じチームが2つに分かれて紅白線が行われていた。

私はひょんなことからトップ下を任されたが、キックオフの笛が鳴ってしばらくすると、自分はボランチのポジションを務めた方がいいのではないかと思った。というのも、相手のエースに対するマークが薄く、中央で彼が自由にプレーしており、自分がトップ下のポジションで高い位置にいると、彼を見ることができなくなってしまうからであった。なぜだかこちらのチームのメンバーは、相手のエースが自由にプレーできていることに気づいておらず、私は他のメンバーにひっそりとその点を伝え、こちらのチームのボランチの選手とポジションを替わってもらった。

すると、こちらのチームがいつの間にか先制点を入れた。それによって勢いづいたのか、もう一点立て続けに得点を入れた。それによって、私がエースをマークしなくてもいいのではないかという他のメンバーからの声が聞こえてきたが、念のため私が彼をマークすることにした。どうも自分は、コートの全体を見ながら前後に行ったり来たりすることが好きならしく、ボランチの方がそうしたことが可能であったから、そのポジションを務めることは心地良かった。

その後、大学時代に知り合ったあるJリーグの下部組織出身の友人がこちらのチームにいたので、攻撃は彼に期待することにし、その旨を彼に伝えたところで夢の場面が変わった。次の夢の場面では、私は結婚式場のような場所にいた。ただし、そこでは結婚式は行われおらず、何人かの人たちが丸テーブルに分かれて座っており、談笑を楽しんでいた。

しばらくすると、日本のある有名歌手の歌をいくつかのパートに分けて、各テーブルが1つずつパートを歌うことになった。私はそれを見守っていたのだが、どういうわけか突然自分にふりが来て、最後の箇所を歌って欲しいと友人からお願いされた。お願いをしてきたのは高校時代の友人（TK）だった。特に断る理由もなかったので、私が最後の箇所を歌うと、実はそれは歌詞足らずだったようであり、実際にはもう少し続きがあるようだった。そこで友人は、残りの部分は携帯から曲を流して、それでカバーすることにし始めた。

携帯から曲が流れてきたところで夢の場面が変わった。最後の夢の場面では、私は沼の脇にいた。確かにそこは沼地だったが、春の花々が咲き誇っており、どことなく日本的なものを感じた。そ

れはとても懐かしい感覚だった。どうやらここで私は、沼地をデジタルアートとして絵画にすることになっていたようだ。その作品をある旅行会社に提供し、旅のパンフレットの表紙に使ってもらうことになっていた。

いざ絵を描き始めようとすると、私の体は小中学校時代を過ごした社宅の自室にあった。そこで私は、サッカーの練習が終わった後なのか、長い靴下とテーピングを外そうとしていた。なかなかテーピングが外れず苦戦していたが、なんとかそれを外すと、リビングから人の声が聞こえてきた。テーピングを外し終えた後にリビングに向かうと、そこには中学校時代の体育の先生と現在協働している知人の方がいて、今後の協働プロジェクトについて話し合っていた。私もそのプロジェクトに参画することになっていたが、今回は参加者と環境の都合上、私はそのプロジェクトに加わることがなくなった。知人の方はそれを伝えにくそうに私に述べたが、私は全く気にしていなかった。

すると、横にいた中学校時代の体育の先生が、「洋平とはこれから別のプロジェクトで一緒になるからな。その時はよろしく」と言われた。どうやら私は、先生とこれから何か別のプロジェクトを通じて協働することになっているらしかった。知人の方から今回私が参加しなくなったプロジェクトの予算表を見せてもらったところ、私の代わりに別の人が2人入っており、2人に仕事を依頼する追加の費用は、私にかかる費用よりも大きく、今回は予算の都合ではなく、本当に参加者と環境の都合のために自分がこのプロジェクトに加わらなくなったのだと知った。フローニンゲン：2020/4/14（火）07:34

5735.マドリガルに関する1冊の古書との出会い

時刻は午後7時を迎えた。今は幸いにも夕日が少しばかり見えるが、今日は天気予報の通り、曇りがちな1日だった。それでいて気温が低く、午後に出かけた際にはマフラーと手袋を忘れ、随分と寒い思いをした。ズボンの下にヒートテックを履くことをしなかったので、足下からも寒さが漂ってきた。

今日の午後には街の中心部に出かけ、かかりつけの美容師のメルヴィンに髪を切ってもらう予定だった。ところが店に到着してみると、張り紙が貼られており、コロナウイルスの影響で店が休みになっていた。前回髪を切ってもらったときに今回の分の予約を済ませていたのだが、店が休みであ

るとのメールは届いておらず、メルヴィンの安否を確かめるためにテキストメッセージを送った。すぐにその返信が帰ってくることはなく、その足で行きつけの古書店ISISに立ち寄った。

幸にも店はやっていて、店主のテオさんと奥さんは元気そうだった。今日も店内には心地良いクラシック音楽が流れていて、それを聴きながら本を吟味して行った。いつものように心理学コーナー、哲学書コーナーを確認した後に、経済学や政治学コーナーに立ち寄った。だが、それらのコーナーでは興味深い書籍はありながらも、購入するほどのものではなかった。次に、易経やタロット占いなどのコーナーに行き、そこでもざっと棚を確認し、立ち読みをしながら自分の知らない知識項目のカテゴリー分類をざっと行っていた。易経を活用した作曲家のヨーゼフ･マティアス･ハウアーや、タロットカードを活用して作曲を行っていたドビュッシーのことが思い出され、それらのコーナーの書籍を確認したが、それらを作曲に活用するのはしばらく後のことになるように思われた。今は易経やタロットカードを活用した作曲にそれほど関心はなく、1つのアイデアとしてそれを持っておくような感じだ。その後、画集コーナーに行ったところ、大抵の画集がオランダ語だったので、購入を控えた。それと、今すでに大抵の画家の画集を持っており、新たに購入するものはそれほどないように思えたのである。

近々足を運ぶ予定のピエト･モンドリアン美術館では彼の画集を購入しようと考えており、今後は自分が訪れた美術館で良いと思う画集を購入するようにしたいと思う。最後に音楽コーナーに立ち寄り、そこで1冊ほど光る古書を見つけた。その書籍のタイトルは“The English Madrigal Composers (1921)”というものであり、オックスフォード大学出版から出版されたものだ。オックスフォード大学出版には音楽関係で良い書籍が数多くある。

書籍のタイトルにある“madrigal（マドリガル）”というのは、14世紀から17世紀にかけて発展した多声声楽曲のことを指している。本書の中身を確認したところ、譜例も適度にあり、それでいて解説が非常に面白いと思い、すぐに購入を決めた。

序文において、著者が第一次世界大戦のために出版が遅れてしまったことに対してお詫びの言葉を述べていたのが妙に心に響いた。本書の出版はそれほどまでに古いのだ。本書で取り上げられている作曲家の誰1人知ることなく、彼らがどのような作曲家であるのかを知りたく思い、また彼らがどのような音楽を残したのかを知りたくなった。彼らの譜例を眺めて音符を追っていると、彼らが私

に語りかけてくるような感覚があった。やはり音楽は意味伝達手段なのだ。彼らが時空を超えて、何かを語りかけてきている。そのようなことを思った私は、譜例を通じて、彼らが曲に込めた意味や思いを知りたくなり、また彼らと対話をしたくなった。そうしたこともあり本書の購入を決めたのである。

私はこの古書店に訪れると、大抵いつも大量に古書を購入するのだが、本日は上記の書籍だけを購入することにした。レジでテオさんとやり取りをしているときにも、いつもと違って1冊しか購入しないことにテオさんも不思議に思っているように思えた。良い古書と巡り会えたことに私は満足し、満足感に満たされた形で店を出た。フローニンゲン：2020/4/14（火）19:28

5736. 最初の一音・最初の一筆

時刻は午前5時半を過ぎ、空がダークブルーに変わり始めた。小鳥たちも鳴き声を上げ始め、1日の始まりを祝福している。

昨夜からまた気温が低くなり、昨夜は湯たんぽを使って就寝した。ここから1週間は夜から未明にかけての気温が低いので、引き続き湯たんぽを使って就寝する必要がありそうだ。

昨日の日記で書き留めたように、本来であれば昨日髪を切ってもらう予定だったのだが、コロナウイルスの影響で、かかりつけの美容師のメルヴィンの店が閉まっていた。自宅に帰ってから彼の店のウェブサイトを調べてみたところ、先月から今月末にかけて1ヶ月以上も店を閉めていたようだ。ちょうど再来週の水曜日から営業を再開するとのことだったので、早速予約を入れておいた。これまでは6週間に1度髪を切ってもらっていたが、今回は8週間ぶりの散髪となる。再来週の月曜あたりになってくると、少々髪の毛が煩わしいかもしれない。

いずれにせよ、メルヴィンの店の営業が再開されることは朗報であり、昨日街の中心部を見る限りだと、大半の店が開き始めており、人々の姿も戻ってきているように思う。先の見えなかった事態も少しずつ収束に向かっていることを願う。

昨日もいくつかの絵を描いていた。作曲に関して言えば、今は1日に少なくとも10曲以上作ることが当たり前になっている。数えてみると、昨日は11枚ほどの絵を描いていたようだ。早朝にいくつか、

午前中に休憩としていくつか、午後にいくつか、夜にいくつか描いていると、合計で11枚ほどになったようだ。絵画に関してもそれくらいの数を描いていくことがちょうど良いように思う。

油絵を描き始めて日が浅いが、絵を描く中で、自分が好むモチーフのようなものがあることに気づき始めている。それは、円や羽のようなモチーフである。こうしたモチーフは自分にとって何か意味があるのだろうから、それらを大切にしたい。

筆の動かし方は、これからより意識したい点である。フローニンゲンの街にはいくつも画廊があるが、そうした画廊の前を通るたびに、そこでふと足を止める自分がいる。画廊の中の絵を外から覗き込み、筆致を参考にしようとしている自分が早くも生まれている。今後は、美術館だけではなく、世界の様々な街にある画廊をぶらりと訪れて、そこで筆致を参考にするのもいいだろう。それに加えて、引き続き画集を眺めて、参考にできるところは全て自分の絵に取り入れていくようにしたい。

作曲でも絵画の創作でもそうなのだが、おそらく感覚的に動きたい方向に身体意識を動かすことが重要なのだと思う。曲にせよ、絵にせよ、ひとたびその創作プロセスが開始されたら、すなわち最初の音や最初の筆が生み落とされた瞬間に、目には見えない全体像というのがもうすでにそこにあり、そこに向かって音や筆が動いていくようになっているような気がしている。

音や筆を最終的な全体に向けて動かしていくのがまさに内側の感覚であり、ことさら身体意識だと思われる。比喩的に言えば、プロ棋士が局面の流れに逆らわず、大局観を持った中で感覚的に打ちたいと思う手を打とうとするように音や筆を置いていく。そうすると、最初の一音や一筆が志向していた全体に向かって自然と創造プロセスが進んでいくのではないかと思われる。興味深いのは、まさに複雑性科学における初期値問題のように、最初の一音や一筆が起点となって、そこからバタフライ効果が働き、最終的な創造物の様子が大きく変わっていく。ここから、最初の一音や一筆の重要性が見えてくる。そして、そうした一音や一筆を最終的な創造物に育んでいくための内側の感覚を涵養していく重要性も見えてくる。フローニンゲン:2020/4/15(水)06:11

5737. 創作活動のモチーフ:今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。辺りはうっすらと明るくなってきている。今日は風もなく、とても穏やかな朝の世界が開けようとしている。

今日は昼前に1件ほど協働プロジェクト関係のオンラインミーティングがある。今日のその他の時間に関しては、いつものように創作活動に充てていこうと思う。

この世界に存在するありとあらゆる存在者の中に内在している精霊を描いていこうということを昨日改めて思った。そうした精霊は、時間の中にだって存在しているのだ。自分が描いていきたいのは、この世界のその瞬間瞬間の中で輝いている生命なのだろう。命のない物の中にも生命を見出すこと。そこには生き物とは異なる別種の生命が存在しているのだ。それは、創造エネルギーの顕現であり、そうしたものを描いていく。

それでは今朝方の夢について振り返った後に少しばかり絵を描き、そこからいつものように早朝の作曲実践に入りたい。ここから午前11時のミーティングまでは全ての時間を創作活動に充てる。

夢の中で私は、海が望める小高い丘の上にある進学塾を訪問していた。その塾は丘の上のオアシスの中にあり、環境としては申し分なかった。塾に到着すると、そこではプロモーションビデオが流されており、そのビデオに映っている塾の姿は、実物よりもさらに美しかった。幾分脚色されていると思えるほどの見栄えだった。私がこの塾にやってきたのは、何もここで勉強するためではない。単なる好奇心からであり、同時に社会見学の一環のようだった。

塾の中には高校生たちが何人かいて、みんな思い思いに勉強をしていた。彼らが勉強していたのは、個別ブースではなく、開放的な空間だった。どうやらこの塾には個別ブースのようなものはなく、複数の生徒が一つの長机を共有するような形で勉強するようになっていた。すると、学長が勉強スペースに顔を出し、生徒全員に向けて激励の言葉を述べ始めた。

すると生徒たちは、少しざわつき始め、学長は静粛にと生徒に呼びかけた。1人だけ最後まで話をしている生徒がいて、その生徒の方を見ると、小中高時代の友人（SN）だった。彼は依然として話をし続けており、ついには塾長に怒られた。それでも彼は、横にいた友人にひそひそ話を続けていた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は砂浜の上にいた。雰囲気から察すると、そこは実家の近くにある瀬戸内海かと思われた。私はそこで友人たちと一緒に、フリスビーのようなものを海に向かって投げて、それが海面を何回跳ね上げたかを競う遊びに興じていた。しばらくその遊びをしていると、どういうわ

けか、卒業した大学の入試問題の話になった。私が卒業した大学は、日本でも有数の記述量を持つ問題を出題する。とりわけ私が選択した世界史はその筆頭だった。私は横にいた何人かの友人に対して、まずは簡単に英語と数学の記述式問題の特徴を伝え、その後に国語の記述式問題の傾向について伝えた。国語に関しては、最初の二題が現代文、その次に融合文(現古融合･現漢融合･現古漢融合)が出題される。最後の問題は要約問題だと伝えた。

私が受験した時から今においてもその傾向は変わっていなかったが、夢の中の私は要約問題の後に、要約した文章に対して自らの考えを表明する小論文のようなものがあると友人に伝えていた。最後に世界史の記述問題の特徴について説明をした。大抵の問題は400字ほどの制限字数が課せられており、その中でテーマに対する文章を記述していくことが求められていた。今でも思うが、その要求水準は高く、高校生にとっては相当に過酷な記述問題が出題される。そのようなことを友人に伝えた後に、私たちは浜から引き揚げ、松林の方に向かって行った。そこで偶然ながら、中学校時代にテニス部に所属していた友人と、中学校は異なるが、中学時代にテニス部に所属していた高校時代に仲良くなった友人たちと出会った。

どうやらこれから最後の大会があるらしい。それはまず市内レベルのものらしく、そこで勝ち抜けば県大会に出場できるとのことだった。中学校時代の友人にまず話を聞いたところ、組み合わせがそれほどいいものではないとのことだった。そこで私は少し首を傾げた。というのも、彼と同組には、いつも優勝する他校のペアがいなかったからだ。彼曰く、今の自分たちであれば彼らに勝つことができるとのことであり、逆に同組には最近力を急速につけているペアがいるとのことだった。その後、彼からバスケ部の状況について尋ねられ、バスケ部は県大会には出られそうだと伝えた。フローニンゲン:2020/4/15(水)06:43

5738. チーズの再考: 作品の創り手の心身の状態

時刻は午後7時半に向かっている。今日はとても暖かく、大変良い天気だった。日中には書斎で日光浴を楽しむことができた。太陽からエネルギーを分け与えてもらい、それを創作活動に充てることによって、そのエネルギーをこの世界に還元しようとしている自分がいる。

今日は久しぶりにチーズを食べた。自分でも笑ってしまうが、早朝にチーズを欲する自分がいて、それを絵として表現した。この数ヶ月間チーズを食べていなかったのだが、今の食生活にもう少しタンパク質を増やしたほうがいいかと思った。というのも、これまではタンパク質を摂取するためにソイプロテインを摂っていたのだが、その消化が非常に遅く、自分の身体にソイプロテインはそれほど合わないように思えたのである。

ソイプロテインを飲むことを控えてしばらく経ち、そこから少しタンパク質が少ない食事が続いていた。チーズの種類にもよるが、チーズからも良質なタンパク質を摂取することができるため、今日からチーズを少し食べることにした。ここから新たにチーズという1つの変数を食実践に加え、その変数の追加が自分の心身にどのような変化をもたらすのか観察したい。今も肌の調子が悪いわけではないが、旅行中にはチーズを食べるようにしており、旅行中の方が肌の調子が良いように感じていたことも今日からチーズを食べ始めるきっかけになった。

肌に加え、チーズがこれからどのように自分に作用するのか観察しがいがある。チーズを夕食に加えたことによって、その分、夕食時に食べるジャガイモとサツマイモの量を若干減らすことにした。このところ夜の食事量がさらに減っており、それによって心身の状態が非常に良好のため、チーズを加えたことによって微調整をする必要があった。今後も少量の夕食にして、就寝前にはすでに消化がほぼ終わっているような状態にしたい。

くれぐれも未消化のまま眠るという愚行を犯さないようにする。それは次の日の心身の状態に大きく作用し、楽しみの創作活動に支障をきたす。心身の状態は、生み出す曲や絵画に反映されるということについて偶然にも本日考えていた。曲や絵画を見聞きした瞬間に、その作り手の心身の状態がどのようなものであったかがおおよそ想像できてしまう。

可能な限り、自分の生み出す創造物には良質なエネルギーが内包されていて欲しいと思う。いつか納得のいく曲や絵画を生み出すことができるようになれば、それを聴く人·見る人に肯定的な影響をもたらすことができればと思う。作品の創り手である自分の心身状態が、その作品の持つ治癒と変容作用を左右するということについては肝に銘じておこう。日々の食実践や適度な運動を大切にしているのは、まさにそうした理由による。

© YOHEI KATO 2020

今日もウォルター･ピストンのハーモニーに関する書籍を参考にして曲を作っていった。気がつけば、この分厚い書籍も350ページほど読み進めていた。今回は一つ一つの譜例を再現し、それをアレンジすることを通じてコラージュ的に曲を作っている。とりわけ今日は、自分の学習方法が正しい方向に進んでいることを実感した。

譜例の中で自分の心に響く和音やメロディーがあった際には、そこで一度立ち止まり、その音の正体を突き止め、分析をするようにしている。そこで自分なりに頭を働かせて、その響きの構造的特性を捉え、今後そうした音を自らの手で生み出せるようにしていく方向に歩みが進んでいる。これは明日以降も意識したいことである。

自分の心を捕らえる一音に立ち止まり、それとじっくり向き合うこと。それをこれからも継続して行こう。その鍛錬の継続が、いつかよりまとまった形で自分の納得のいく音を生み出すことにつながっていくだろう。日々の学習と実践、及び創作活動を通じて絶えず感動体験をすること。それを忘れないようにしたい。フローニンゲン：2020/4/15（水）19:42

5739. 今朝方の夢：言語の習得と作曲・絵画の実践

時刻は午前5時半を過ぎた。今朝の起床は午前5時であり、その時にはもう小鳥たちが鳴き声を上げ始めていた。今日は彼らの方が早起きだったようだ。

ちょうど今、早朝のヨガの実践と、音楽に合わせて踊りを踊り終えたところである。今のフローニンゲンの気温は3度と低いが、身体を動かしたこともあり、書斎と寝室の窓を開けていても寒さを感じない。それよりも体がポカポカしているぐらいだ。このように早朝に身体を動かすことによって、1日の活動に向けた準備が整う。心身の状態を整えてから創作活動に取り組むこと。それは欠かせないことである。

早朝のヨガの実践に入る前に、ヨガマットの上で呼吸法を行い、瞑想的な意識状態に入ることを今日も行なった。とても静かな心の状態がもたらされ、その状態は今も続いている。

ダークブルーに変わり始めた空を眺めながら、今朝方の夢について振り返りたい。夢の中で私は、日本なのかヨーロッパなのかよくわからない街で、何か探し物をしていた。これまでアメリカでも生活

をしていた経験からすると、その街はアメリカでないことは確かだった。そうした街で宝探しのような形で探し物をしていた。それは決して失くしたものを探すのではなく、隠れているものを探すような状況であった。しばらく探し物をしていてもそれが見つかることはなく、私は新幹線のような列車に乗った。車内の雰囲気からすると、その列車は日本製のものだった。

どういうわけか、その新幹線の中でも私は引き続き探し物をしていた。その時の自分の気持ちは中立的であり、特に否定的な感情もなく、肯定的な感情もなかったように思う。静かな心で淡々と探し物をしていたような感じだ。それが見つかることを期待するのでもなく、本当に淡々と探し物をしていた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、高校時代の友人（HH）と話をしていた。彼と話をしていると、私たちの目の前を、小中高時代の親友（NK）が通り過ぎようとしており、彼はとてもかっこいいスリーピースのスーツを着ていた。実はその場にいた彼もまたかっこいいスリーピースのスーツを着ていたのだが、私からすると、2人が着ているものを交換したら2人がもっとかっこよく見えるのではないかと思った。そうしたこともあり、私は2人にスーツの交換をすることを提案した。彼らもその提案を喜んでおり、早速スーツを交換し、着替えてみたところ、やはり2人は先ほどよりもかっこよく見えた。2人の喜ぶ姿を見て、私の中からも喜びの感情が芽生えたところで夢から覚めた。実際には、今朝はもう少し他の夢を見ていたような気がする。

夢の世界は本当に底がしれないほどに深い。それは創造の源になっていて、夢の世界を起点に曲や絵画を生み出していきたいと思うぐらいだ。無意識の探求を兼ねた創作活動を今日も行なって行こう。創作物の全ては、無意識の何かしらの反映であり、無意識に起源を持つ。

昨日はふと、外国語において、非ネイティブの人間がネイティブ以上の文章を執筆することが可能なように、音言語や絵画言語でもそうした言語習得がなしうるということについて考えていた。それらの言語にも文法のようなものがあり、その実用的文法の運用方法を鍛錬しているのが今の自分の状況だろうか。英語の文法を無意識的に使いこなし、自分独自の文章の生成ができるようになるまでに多大な時間を要した。音言語や絵画言語の習得にも膨大な時間がかかるだろうが、それらもまた言語であることに変わりはないであろうから、言語習得の観点からも作曲実践と絵画の創作に取り組んでみようかと思う。フローニンゲン：2020/4/16（木）06:07

5740. 人生の縮図としての創作物

昨日に引き続き、今日も晴天に恵まれた1日だった。そして、創作活動に打ち込み続ける1日だった。午前中に1件ほど協働プロジェクト関係のオンラインミーティングがあった以外はほぼ全ての時間を創作活動に充てていた。改めて、曲を作ったり、絵を描いている最中の自分が大いにくつろいでいることに気づいた。それらの創作活動は、魂をくつろがせているようなのだ。不思議なことに、それらの創作活動に従事しているはずの魂が、そうした活動を通じてくつろいでいるというのが興味深い。魂は創作を通じて治癒され、そして変容していくのだろう。創造は、内面世界に調和と変容をもたらす。それを改めて実感する1日であった。

先日までは集中的に読書をしていたが、再び読書から離れている。今は他者の言葉から距離を取り、読書を控える時期だ。また近々集中的に読書に励む時期がやってくるだろう。それはサイクルを持っている。今温めている探究テーマがいくつかあり、次回に書籍を大量注文する際には、それらのテーマに関する書籍を購入することになるだろう。そして、その時に関心を持っている新鮮なテーマに関する書籍も購入する予定だ。

再度絵を描く目的について思いを巡らせていると、その1つとして、自分の内面世界の固有の色と形を把握したいと思っている自分がいることに気づく。内面世界に固有の色と形を絵として表現し続けていくと、それらがどのように発達していくのかにも関心がある。

毎回作曲をしていて面白いのは、1度たりとも全く同じ曲が生まれないということであり、それは絵画の創作にも当てはまる。全てが1度限りであるということ。まさにそれは人生そのものに他ならない。そのように考えてみると、人生を1つの巨大な生命と見立てた時に、1つ1つの創作物というのは人生のフラクタルだと言えるかもしれない。すなわち、それらは人生の縮図なのである。しかもその縮図は、毎回新たな表情を見せる。

1つ1つの作品には固有の命が宿っている。それは儚く一回限りのものだが、それが作品という形となった瞬間に永遠の命を得る。今日生み出した曲も絵も、自分の1度限りの人生の縮図であると思うと、それらの創造物に対する見方がまた変わる。そして、創作活動そのものに取り組む姿勢も変わる。

今日はこれから就寝までの時間を使って、曲の原型モデルを作成していく。今日はバッハの曲に関していくつか原型モデルを作ろうと思う。それと、ロベルト･シューマンの曲も参照しようかと思う。ある程度原型モデルを作ったら、1日を締め括るために再度絵を描こうと思う。

午前中にふと、書道的なものと絵画的なものを組み合わせていくと面白いかもしれないと閃いた。そうした表現を今の自分は好んでいるらしいのだ。文字のようなものとシンボルを組み合わせ、そこに治癒と変容を促すエネルギーを込めていく。そのような意図を持って今夜もまた絵を描こう。フローニンゲン：2020/4/16（木）19:21